

## 戦災・震災をこえて

昭和20(1945)年の空襲、同23(1948)年の地震と、福井は2度の大きな被害をのりこえて現在に続く都市の発展を続けてきました。のこされている写真や記録は災害の悲惨さ・深刻さ、当時の人々の復興への熱意をうかがわせます。



福井地震直後の木田町界限(当館蔵)

## 趣味を楽しむ余裕も



ナショナルラジオRE-860(上)  
とニコンNikomax-F7(右)  
(いずれも個人蔵)



高度成長期、日本のモノづくりも急速な発達をとり、世界に誇れるものとなってきました。同時に趣味を楽しむ経済的余裕も出てきたこの頃、昭和40(1965)年当時の大卒初任給は2万円~2万5千円程度。プロではなく、趣味で音楽や写真などを楽しむ人に向けた様々な製品が、そのくらいの値段で手が届くようになりました。

## 経済成長と観光ブーム

高度経済成長期をへて、市民生活が豊かになるとともに旅行を楽しむ人も急増しました。昭和40~50年代にはそんな観光のお土産として定番だった「ペナント」。修学旅行のお土産に買った、集めて部屋に飾っていた、という方も少なくないのではないでしょうか。



観光地ペナント：九頭竜ダム(個人蔵)

## 平成時代

### 「遊び」も変わる

始まったのはついこの間、という感覚をお持ちの方も多いのではないかとありますが、この30年がかつてないほど我々の社会・文化・生活の変化のスピードは大きくなっているようです。遊びのスタイルも、昭和50年代の家庭用ゲーム機の登場とともに大きく変わり、平成のネット社会到来とともにさらに変化を続けています。ゲームは現代をいろどる文化の一要素ともなりつつあります。



家庭用ゲーム機(個人蔵)

## 新生・郷土歴史博物館

昭和28(1953)年以来60年以上の歴史を持つ当館も、平成16(2004)年に足羽山から現地に移り、新しく生まれ変わりました。これからも、歴史を知る喜び、学ぶ楽しみの輪を広げるため、さまざまな事業を展開していきます。

建築中の屋外展示「舎人門」(復原された福井城の城門)



### 【次回の展示】

秋季特別展  
「将軍家茂と皇女和宮一行が彩った二人の幕末-」  
令和元年10月12日(土)~11月24日(日)

展示解説シート No.124  
令和元年7月20日発行  
福井市立郷土歴史博物館  
〒910-0004 福井市宝永3-12-1  
電話 0776-21-0489  
Fax 0776-21-1489  
担当：松村知也  
印刷：宮本印刷

### ギャラリートークやります。

(学芸員による展示解説)  
7月21日(日)・8月11日(日・祝)  
8月18日(日)  
各日とも午後3時より、40分程度。

中核市移行・市制130周年記念 夏季特別陳列②

## ありがとう平成 —博物館コレクションでみる明治~平成—

●会場 2階 企画展示室

●会期 7月20日より8月25日まで  
(休館日)8月19日

### はじめに

本年5月1日、30年続いた「平成」から新元号「令和」の時代となり、明治に「一世一元の制」が定められて以来、5つの時代が去来したこととなりました。「福井市」も明治の世に産声をあげ、以来ちょうど130年、さまざまな時代の起伏を乗り越えて歩んできました。

本展ではこれらを記念して、当館所蔵資料を中心に、明治から平成までの数々の出来事の記録、様々な時代を彩ったくらしの中の道具を展示し、「あのころ」を振り返ります。

### 明治時代

#### 明治改元うらばなし

江戸時代以前には、元号の変更(改元)は様々な理由により行われましたが、明治維新後は「一世一元の制」がとられ、天皇一代に元号は1つのみとなりました。そんな中、旧福井藩主・松平春嶽は、明治改元に深く関わりました。春嶽が著した『逸事史補』によりますと、元号はそれまで朝廷での会議により最終決定されていたが、このときには春嶽が5~6つの候補をあげ、明治天皇がくじ引きを行って神意をうかがい、「明治」の元号を決めたということです。



『逸事史補』(福井市春嶽公記念文庫、当館蔵)

#### 「日常」をきりとる

19世紀前半に発明された写真の技術が日本に入ってきたのが幕末期。それから間もない明治時代には、まだ一般的とはいえないにしても、福井でもさまざまな日常を切り取った写真が残されています。これは感光材料をガラス板に塗ったもの(ガラス湿板)で撮影された写真で、この後、より便利な「ガラス乾板」、さらに「フィルム」がとって代わり、さらに現代にはデジタルカメラが普及しています。

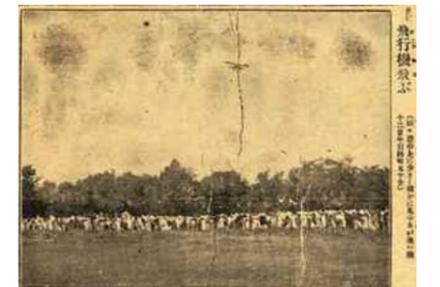


ガラス湿板写真(当館蔵)

### 大正時代

#### 飛行機、福井に来たる

ライト兄弟による初の有人飛行が1903年、日本では明治43(1910)年に輸入飛行機での初飛行が行われました。その後大正2(1913)年には民間の団体「帝国飛行協会」が発足、日本各地で「飛行家」たちが自慢の飛行機を飛ばす「飛行大会」が開催され多くの人々を魅了しました。飛行機はその後、軍事や交通の分野で大きな変革を起こしました。写真は、大正5年に飛行家・尾崎行輝(衆議院議員・東京市長尾崎行雄の四男)が自身の飛行機で来福した際の新聞記事です。



飛行家・尾崎行輝の来福を伝える新聞記事(当館蔵)

## 汽車での旅行日記



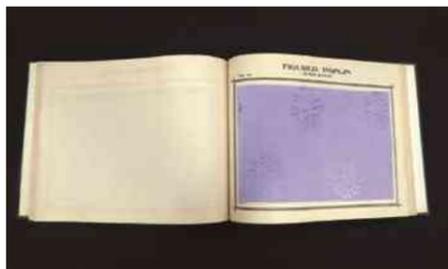
大正5（1916）年4月16日～24日の9日間、大阪から福井の各地を旅行した記録です。途中の駅、見えた山や海、通ったトンネルなど細かく記されています。昼前に大阪梅田駅を出発して鯖江に着いたのが午後6時、「汽車賃」は1円83銭（現在の価値にして約6,000円）との記述もあります。現在の特急列車での所用時間の3倍以上かかる蒸気機関車の旅だったようですが、途中食事をとりながらの、けっこうのんびりとした旅だったのかもしれませんが。

『旅行記事 大正五年四月十六日 越前行』（個人蔵、当館保管）

## 昭和時代（戦前・戦中）

### 繊維王国・福井

明治以降、羽二重を中心とした絹織物の一大生産地となった福井ですが、昭和初期には人絹織物への転換が進み、昭和15（1940）年頃には世界的な生産地となりました。昭和初期、県織物同業組合が製作したと思われる国外輸出向け生地の見本には、伝統の羽二重とともにレーヨンなど化学繊維を使った生地も多く見られます。



海外向け織物生地見本帳(当館蔵)

### 暗い世情の中でも…

昭和15（1940）年という、日中戦争のさなか、またアメリカやイギリスなどとの関係も悪化して、戦争の暗い影が日常生活にも色濃くなってきた頃です。そのような中で、福井高等女学校の修学旅行の旅程図と、ある女学生がその際に買い求めたお土産です。

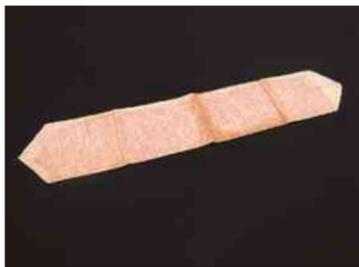
福井からまず伊勢参り、さらに奈良の橿原神宮、奈良市内、京都と、歴史ある神社や寺院、史蹟を訪ねた旅のようです。お土産も古都の情景の絵はがき、勾玉形のしおりと、女学生らしいチョイスの奈良京都みやげですね。



昭和15年福井高等女学校修学旅行旅程図とお土産（当館蔵）

### 無事の生還を願って

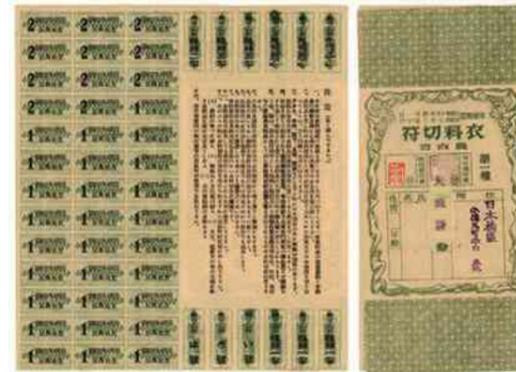
「千人針」は1mほどの長さの白布に、千人の女性に赤い糸で1人1針ずつ縫って玉どめをしてもらったもの。日露戦争の頃から出征する兵士に贈る風習が始まり、日中戦争時には、街頭で通行中の女性に協力を求める風景がよく見られました。この布を身につけると「弾避け」となるという信仰があり、戦場から無事生還してほしいという切実な願いが込められています。



千人針腹巻(当館蔵)

## 戦時下の生活

昭和17（1942）年から衣料の切符制が実施され、買い物にはお金のほかに点数のついた切符が必要になりました。右の切符は昭和19年のもので、1人が1年間に使える点数が50点。点数を細かく切り取って使います。衣料の点数は作業服上下30点、半袖シャツ8点、下着5点、靴下・タオル3点などで、結婚間近の女性・妊婦・被災者などは少し優遇があったようですが、当時の厳しい物資不足がよくうかがえます。



昭和19（1944）年の衣料切符(当館蔵)

## 空襲のつめあと

太平洋戦争末期の日本の都市は、空襲により大きな被害を受けました。福井も昭和20（1945）年の7月に空襲を受け、1,500名以上の死者と多くの負傷者を出し、多くの家屋が灰となりました。「罹災証明書」は空襲の被害を受けたことを証明するもので、これで鉄道の乗車券を優先して発行してもらえたり、避難先でも配給がうけられました。

福井空襲では市役所も被害を受けており、焼け跡に机を出して職員が証明書を発行しました。戸籍なども燃えてしまっ確認する方法がないなど、手探りでの交付作業だったようです。展示の罹災証明書にも配給の記録や戦災給付金の給付の記録などが走り書きされています。



空襲後開設された被災者相談所(当館蔵)



昭和20年7月20日付 罹災証明書(当館蔵)

## 昭和時代（戦後）



明治～昭和の貨幣(当館蔵、一部個人蔵)

## お金の変遷

明治以降、全国で流通するお金（貨幣）が使われるようになり、さまざまな事情によりさまざまな材質・デザインのコインや紙幣が作られました。

第一次世界大戦による銀の高騰により作られた「小額政府紙幣」や戦後に余った銃弾を再利用した50銭黄銅貨など、その理由にもその時代の背景があります。紙幣のデザインとなった人物・モチーフにもその時代の感覚がうかがえます。